平成30(2018)年「正覚寺報」9月号

◆ご　案　内

①仏教壮年会お聴聞の会 9月2日(日)20時～

本格的な御法話が聞きたい、お聴聞がしたいとの念願に支えられて営んで参りました仏教壮年会恒例のお聴聞の会です。

去る8月17日には、重点プロジェクト推進室部長をお訪ねし、本願寺派 SDGs が重点プロジェクトに掲げられる背景下で積年の課題が未解決のまま放置されているのでそれを取り上げてこその実践運動でなくてはならないと申し上げ、解決策の一端をご提案申して参りました。

国際部ではまもなく御門主の海外ご巡教に帯同なさる先生にエールを送らせて戴いて参りました。当日はそうした話題をご紹介することになります。皆様賑やかにお参り下さい。

②仏教婦人会例会 9月16日(日)19時半～

仏婦月例会もその趣旨はお聴聞の会にあります。お聴聞を継続するうちに如来様のお育てに与るのです。皆様賑やかにお参り下さい。

③正覚寺彼岸会 9月22日(土)14時、19時半

春秋恒例の彼岸会です。お昼の坐、夜の坐でしっかりお聴聞して戴くことが目的です。他院様の日程も固まり次第後日ご案内致します。皆様にはぜひとも賑やかにお参り下さいませ。

◆極楽浄土のお姿を目の辺りにしたい

八月八日には草津市南桜の社会福祉施設“悠紀の里”を訪問布教致しました。

会場に入りますと車椅子の入居者のお一人からそれはしっかりしたお声で「○○でございます。今日は御法話を楽しみにしておりました」と迎えられました。曾てのお姿を存じあげておりますので、そのお方からそのようなお声を掛けて戴きますと、今日はどのようなお話しをさせて戴こうかと一瞬戸惑いさえ覚えます。

ところが話し出しますと、耳が聞こえないとおっしゃる。施設では分かっていた筈ですが、マイクを設備してもらっても結局は聞こえなかったのです。そのお姿を拝見しますと誰もが避けて通れない老境が垣間見え胸が痛みます。

施設法話では、絆を一つにしてきた夫婦だけを渡し守が小島に渡すカズオイシグロの小説の一端をご紹介した後、正覚寺誕生の仏教讃歌「ふとあおぎみるおすがたは」と「のんのさま」第二番の歌詞により如来様のお慈悲をお取り次ぎしながら、お歌を皆様とご一緒に歌わせて戴きおよろこび戴いたのです。

会場には、門徒推進員様がお二人（お一人は、もう三十年来会場の御世話をなさって戴いており、今お一人は教区の門徒推進会会長様）と一遍会場の様子を見たいとご一緒されたお寺の坊守様でいらっしゃいました。

御法話が終って失礼しようとすると呼び止められ施設の一角でお三方としばらくの談話に花が咲きました。

◆先月から奈良国立博物館では「糸の仏」展が開催されています（8月26日まで）。

「糸の仏」というのは刺繍ご本尊が起源です。当麻寺の曼荼羅の修復を記念して開催された大がかりなものです。

聖徳太子がお亡くなりになったとき、お后の橘太郎女（たちばなのおおいらつめ）は、太子が赴かれた世界をこの目で仰ぎたいと発願され、絵師の下絵により「天寿国繍帳（てんじゅこくしゅうちょう）」という刺繍を編ませられました。

極楽浄土の姿を目の辺りにしたいというお后の願いが目に見える形にされた胸打つ一品であり、これが展覧会の本旨でありました。合掌。